OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	動詞呼応の類型(その3)
Author(s)	出口, 厚実
Citation	大阪外国語大学学報. 1980, 49, p. 11-30
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80794
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

動詞呼応の類型（その３）

出　口　厚　実

On the Typology of Nominal-Verb Agreement (3)

Atsumi DEGUCHI

This is part of a crosslinguistic survey of agreement phenomena between the verb and its dependent nominals. The focus of discussion in the following sections will be on the various kinds of disagreement.

A terminological distinction is proposed between *Disagreement* and *Non-agreement*. The verb is said to disagree in a given language if it fails to have an agreement marker matched with a certain nominal which otherwise could trigger a normal agreement. Disagreement is often superficial and the verb may agree in some implicit or deep categories with the nominal in question, or it does not agree at all but does have an agreement morpheme. On the other hand, no agreement markers are found in the verb in the case of Non-agreement. Non-agreement is either partial or complete, i.e. there are languages in which no verb can exhibit agreement. Disagreement is always partial by definition. Disagreement in turn must be distinguished from Discord (Discordance), which is viewed as an incidental "suspension of concord" on the level of language use.

Non-normal agreements that will be discussed in this part are the following:

2.4.5. *S-Agreement* : the verb agrees only with the subject of intransitive clause

2.4.6. *P-Agreement* : the verb agrees only with the direct object of transitive clause

2.5. A typical example of *Local Disagreement* is provided by Romance perfect tenses which manifest also instances of *Complex Agreement*. We will call Complex Agreement the class of agreement phenomena where a single verbal complex bears two or more different kinds of agreement systems, v.g. one of the accusative type and the other of the ergative type. (Compare *Mixed Agreement* discussed in 2.4.0)

2.6. *Forced Agreement* is a special case of Local Disagreement. It arises when the clause lacks any agreed-with nominals but the agreement is obligatory. Agreement marker to be chosen for this case is the least marked form of the whole set. The verb is usually forced to have some agreement marker even if no nominal

argument seems to be involved in the structure or in cases where the candidate of agreement has demoted to a non-agreeing grammatical relation.

2.4.5. 中 格 呼 応

一定の統語的条件下において対格型呼応と能格型呼応が同一言語に共存する例を§ 2.4.0. ～ 2.4.4. で見たが、非統語格呼応(cf. 前稿§ 2.1. ～2.3.)でもなく又、対格型・能格型のどちらでもない呼応が存在する。Comrie[(1)]によればDānesfāni (Iranian) の過去分詞は中格 (viz. 自動詞の主語)とのみ呼応し、他動詞文の動格・受格との間には呼応が見られないという。このケースは絶対格1項呼応から主格1項呼応への移行過程の一段階と分析されれば、統語格による呼応現象であることに変りなく、 accusative type と ergative type の中間に位置する変則的な呼応形式である。

2.4.6. 受 格 呼 応

呼応格の組合せでもう一つの可能性は直接目的語のみと呼応し、中格・動格とは呼応しないタイプが考れられる。カタロニア語複合時制動詞の過去分詞形は、限定された条件の下で、直接目的語の性数と相応するが、他動詞主語・自動詞主語は共に呼詞になり得ない。この受格呼応は、助動詞の主格呼応に呼応の任務を移譲して行く絶対格呼応の退行プロセスの一つの様相として現われるもので〔Catalan の分詞呼応については後述の§2.5.1. 複合呼応でも扱う〕、安定した受格呼応言語の典型が実在するかどうかは疑わしい。

2.5. 非 呼 応 (Local Disagreement)

本稿では不呼応Disagreement、非呼応Local Disagreement、無呼応Non-agreementの3つの概念を区別する。呼応形態素を特徴づける呼応カテゴリーをもった呼詞が存在しないか又は呼詞が異なる形態的基準で変動するケースを不呼応と名付ける。これには、呼詞NPの不在にもかかわらず呼応形態素が出現する無呼詞呼応や、呼詞に相応せず一定不変の agreement marker を示す現象を含む局部的な非呼応と、呼詞の格体系と応詞のそれとが別種のものであるために組織的な文法格の不整合を内包する不呼応のタイプとに下位区分される。

一方、無呼応とは名詞句と動詞が直接統語的関係を持つにもかかわらず、両者の間に呼応形態素(広義で呼応をmark する手段すべてを含む)がない場合を言う。非呼応は、定義上、常に局部的である。しかし無呼応は部分的無呼応と完全無呼応に2分できる。後者は無呼応言語におけるNPと動詞の関係であるが、前者は、呼詞候補NPが存在するが呼応の成立しない場合を指す。言い換えれば、同じ言語内で他の環境では呼応現象が見られるクラスの名詞句・動詞間で一致が停止する事例である。事実、多くの呼応言語で無呼応動詞は頻出する。

呼詞・呼応形態素が外示されながら、両者が組織的に相応しないことが許されるように見えるケ

ースも稀にある。例えば、古典ギリシャ語[2]の中性複数名詞は、通常、単数のagreement markerを持つ動詞形と共起する。

(1) *Τὰ ϛῷα τρέχει* 'The animals run.'
the animals run 3 sg

(2) *Ταῦτα ἐγένετο* 'These things happened.'
these things happened 3 sg.

このような外見上の非呼応は呼応パラダイムの小部分に過渡期的に存在するもので、「不相応」呼応の一種とみなすべきである。上例の場合でも、より古い時期に単数集合名詞の標識であった語末の短母音－αが中性主格対格etc.のpl形に再解釈される史的推移の中で考えるならば、呼応は正常であり、統語カテゴリーの表面的ズレのために呼応体系の中で破格に見えるだけである。なお言語運用のレベルで、言い誤り、思い違いや、呼詞・応詞間の遠隔、意味的牽引に原因する様々な呼応の逸脱はここに言う不呼応と別個のものであり、可変性の"不一致"Discordanceと呼ぶことにする。

非呼応現象は呼応形態素と時制及び(あるいは)相形態素が相互依存の関係にあって、互いに単独で生起できない言語にしばしば発見される。時制付き独立主文において、何らかの事情により呼応の機能が停止する時、又は呼詞NPが欠如する時、これらの構文を標識化する特別な手段を持たない言語は、既存の呼応形態素のsetの中から最も無標なものが選ばれ充てられることが多い。人称・数・性を相応カテゴリーとする呼応では、その際採用される中立形に'3人称''単数''男性'又は'中性'の素性が含まれるのが常である。3人称単数が1・2人称以外の単数名詞句と本来呼応するものであり、無呼詞文で動詞が3・Sg形に指定されるのは、この意味で不呼応の一種である。

2.5.1. 複合呼応

非呼応現象は呼応が衰退し、無呼応化へ向う途上の無標項呼応にその典型を見ることができる。具体例として、非呼応を含むロマンス語の複合呼応を次に見てみよう。複合呼応は異なる様式の呼応が単一の動詞複合内に成立するケースを言い、§2.4.0.で見たような、異格体系の呼応が同一言語内に併存する混合呼応と区別されなければならない。ロマンス諸語の複合時制は、それ自身「時制」屈折を含む補助動詞と本動詞の過去分詞形から構成される迂言表現である。以下に調べた各言語でAuxはすべて主格と一項呼応する。過去分詞は、概ね、絶対格と呼応するタイプの他、部分的対格呼応や非呼応を示すものがある。

2.5.1.1.

現代イタリア語[3]は助動詞essere 'to be'と組み、完了時制を表現する自動詞の過去分詞を主語と性・数呼応させる。一方、avere 'to have'を要求する他の自動詞とすべての他動詞を含む迂言

(3) a. Mario è uscito.
mas. is gone out mas.sg

'Mario has gone out'

b. Luisa è uscita.
fem. is gone out fem.sg
'Luisa has gone out'

形式では、分詞は主語と呼応せず、男性・単数形である。

ところが、(6)のように3人称直接目的語 clitic が動詞に前接されると、分詞はそれと呼応しなけれ

(4) a. Luisa ha dormito.
fem. has slept mas.sg

b.*Luisa ha dormita.
fem. has slept fem.sg
'Luisa has slept'

(5) a. Luisa ha lavato tutte le finestre.
fem. has washed all the windows
mas.sg fem.pl

b.* Luisa ha lavata tutte le finestre.
washed
fem.sg
'Luisa has washed all the windows'

(6) a. I ragazzi l'anno presa (la palla)
the boys it-have caught the ball
fem.sg fem.sg

b.* I ragazzi l'anno preso (la palla).
it-have caught
mas.sg
'The boys have caught it (the ball)'

(7) ? Luisa ha lavate tutte le finestre.
fem. washed all the windows
fem.pl fem.pl

ばならないし、話し手によっては文(7)を文法的と認める。即ち、イタリア語複合時制の過去分詞は自動詞主語と他動詞目的語(＝絶対格)に呼応するパターンが部分的に崩壊し、一部の中格・受格NPとに不呼応が生じる過渡的状況を呈していると言えよう。

付接辞が1・2人称であれば、直接目的語と過去分詞の agreement は任意で、例えば女性に向っての質問として(8) a、bのいずれも可である。ただし動格とは呼応せず、(b)文でも無標の呼応形態素としてmas.sg が代用されている。非代名詞 NP の直接目的語が殆ど呼詞とならず、又1・2人

(8) a. Ti ha colpita ?
you has hit
sg.acc 3sg fem.sg
b. Ti ha colpito ? 'Did it (or he, she) hit you?'
hit
mas.sg

称のclitic が任意的にしか呼応を惹起しない事実は、Parisi[4]の示唆するように、3人称付接辞 lo、la が常に母音で始まる助動詞 avereの直前に置かれることから、尾母音を削除する形態音韻ルールの対象となって性カテゴリーが中和されるのを補償する役目を分詞が負わされることに一因があると説明できるであろう。会話の当事者たる1・2人称の性別は直示的に明らかであるし、又一般NPにおいても性数呼応は余剰性が高く、早く失われたのに対し3人称代名詞では性数の明示は、漠然としたその指示範囲を限定する機能の故に、保持されていると考えられる。[5]

2.5.1.2.

イベリア半島でCastilian(スペイン語)とCatalan の間に狭まれて、辛うじて残存するAragonese の複合時制形にも類似の格体系移行の形跡を認めることができる。Aragonese[6]では少数の自動詞と再帰動詞は ser 'to be' を補助動詞として選び、過去分詞は主語と呼応する。しかし、これらの自

(9) ye plegada ra primabera
is arrived the spring
3sg fem.sg the fem.sg
'spring has come'
(10) yeranos puyáus 'we had gone up'
were gone up
1pl mas.pl

動詞も大部分の地域で、他動詞構文がそうであるように、aber 'to have' と組む傾向が強いと言われる。この場合、過去分詞は主語の如何に拘らず男性単数形呼応形態素で特徴づけられている〔cf.(11)〕のが普通であるが、一部の地方では3人称直接目的語 clitic の性数に呼応する。Aragoneseの

(11) busatros ez trobáu a pilota
you pl have found the ball 'you have found the ball'
2pl mas.sg fem.sg

過去分詞にも非呼応化の趨勢は顕著である。

(12) (las güellas) las han bendidas cuasi todas
the sheep them have sold almost all
fem.pl fem.pl 3pl fem.pl
'They have sold almost all of them (the sheep)'

(13) a bida qu'has feita y has defendida
the life that have made and defended
fem.sg 2sg fem.sg fem.sg
'the life you have made and defended'

2.5.1.3.

複合呼応の一部として絶対格呼応を示していた過去分詞が中立無変化型へ向う過程はカタロニア語においても認められる。現代カタロニア語は自動詞・他動詞すべてに対しhaver 'to have' を助動詞に使用するようになり、過去分詞が中格と一致する例は姿を消した。古カタロニア語にあった(14a)文のような、直接目的語との呼応は衰え、現代語は分詞をmas.sg 無標形に実現する。[7] 付接

(14) a. hem fetes les paus
have made the peaces
1pl fem.pl fem.pl
b. hem fet les paus
have made the peaces
1pl mas.sg the fem.pl
'We have made peace'

辞直接目的語が3人称の時のみ、Agreementが成立し得るが、不呼応化のかなり強い傾向もあって規範文法家の間でも、その範囲と義務性については諸説があった。[8] ただし、すべての3人称前接cliticと分詞が呼応を見せるわけでなく、次例文(a)のように付接辞が過去分詞形で現われる動詞の

(15) a. aquesta cançó, l'he { sentit cantar.
this song it-have { heard sing
fem.sg fem.1sg { mas.sg
*sentida
heard
fem.sg
'This song, I have heard it sung'
b. aquesta dona, l'he sentida cantar.
this woman her-have heard sing
fem.sg fem.sg 1sg fem.sg
'This woman, I have heard her sing'

基底構造における直接目的語でないならば、呼応は行われない。この1'(=1a)は初層においてcantar 'to sing' と結合価をもつ直接目的語だが節縮約(Clause Reduction)によって主動詞sentirの前位に置かれたものに過ぎないからである。

2.5.1.4.

複合時制の構成要素としてのロマンス語過去分詞が、ergative type の呼応から非応詞化に到達した段階はルーマニア語、カスティリヤ語（＝スペイン語）に観察される。両言語において、完了形は各々a avea, haber 'to have' のみをAuxとして、'to be' に相当する助動詞形は受動表現又は形容詞的過去分詞とのみ共起し得る。例文(16)(17)はカスティリヤ語分詞が主語とも、いか

(16) Mi madre ha muerto.
my mother has died
fem.sg 3sg mas.sg
'My mother has died'

(17) a. María ha escrito unas cartas.
Mary has written some letters
fem.sg 3sg mas.sg fem.pl
'Mary has written some letters'

b. María las ha escrito.
them has written
fem.pl 3sg mas.sg

なる直接目的語とも一致せず、男性単数形態素を接尾されていることを示している。

以上の考察から、ロマンス語複合時制の呼応は、助動詞が完全な対格型主格1項呼応を、本動詞の過去分詞が能格型の絶対格1項呼応を持つ複合呼応の原型から、過去分詞が無標形による非呼応へ漸次後退して行き、動詞複合全体としては単純な主格1項呼応型に至る連続体のいくつかの中間点を各言語が呈している好例であることがわかる。

特定のタイプの構造で呼詞の非呼詞化が一般化すると、応詞の agreement morpheme は部分的な固定化を蒙る結果、このような呼応標識に特別な統語カテゴリーを指定する再分析が行われ得る。上例について言えば、unmarked なmarker－oを呼応パラダイムにおける新範疇'中性'と認知して、非呼応の音形的実現と解釈する法もある。そして、又、呼詞の条件を満すNP が存在しないにもかかわらず、他のカテゴリーを明示する目的で呼応が義務づけられている統語的環境にふさわしい呼応形態素として利用されるのもこの標識である。次節では呼詞の不在にもかかわらず動詞が強制的に呼応形態素を持つ非呼応の一種、強制呼応を検討する。

2.6. 強 制 呼 応

2.6.1.

一定の意味クラスにより、又は動詞の語彙的特性によって、無価動詞（avalente verbe, 結合価ゼロの動詞）が呼応言語に対して存在を許される時、それは無呼応ではなく、強制的に呼応させられ

るのが常である。

2.6.1.1.

ラテン語で気象現象を表わす動詞は、通常、主語を欠くが、動詞が時制を表示する限り、主格単項呼応のmarkerを欠くことができず、3人称単数形をとる。殆どの近代ロマンス語でも同様な天候表現で、ラテン語のパタンに従って、6種の人称・数範疇の中で(音形上も)最も無標な3sg. 呼

(18) Plui-t 'It rains'
rain 3sg

(19) Tona-t 'It thunders'
thunder 3sg

応形態素が無主語文動詞に与えられている。

2.6.1.2.

3項呼応のBasque (Navarro－Labourdin)[9]は能格名詞句が明示されない構文により「雨(雪)が降る」を表わすが、能格の3sg.markerが絶対格名詞句「雨」「雪」を受ける3sg. と共に助動

(20) uria egin du 'It rained'
rain do aux
Abs he-it

(21) elhurra egin du. 'It snowed'
snow
Abs

詞ukan〔他動詞と組んで用いられる〕の屈折形duの中に表示されている。それ故、(20)(21)で、uria, elhurraは中格(自動詞主格)でなく受格(他動詞直接目的語)である。

2.6.1.3.

Quechuaの Imbabura[10]方言には、経験者を意味辞項とする一部の動詞と、願望の意味をもつsuffix, －naya－を伴う動詞の構文でExperiencer NPが表層で対格に表示され、主格NPを欠く文がある。動詞は、通常、主格と呼応するが、この場合には強制的に3人称となる。従って(22)

(22) a. can-da rupa-n 'You are hot'
2sg-acc burn-3

b. ñuca-ta nana-n 'I hurt'
1sg-acc hurt-3

で、基底主語と考えられるNP, つまり文中の唯一の辞項、2sg, 1sg代名詞が一致をtriggerしていないのが見られる。上記例文の動詞の他、chiri－'to be cold', yarja－'to be hungry'

(23) can-da micu-naya-n
2sg-acc eat-desid.-3
'You would like to eat'

及びmuna－' to want ' が同様に用いられるが、これらの動詞に対し任意的に付接辞による呼応が可能である。勿論、その時でも主格の agreement morpheme は3人称に留まる。

(24) a. (ñuca-ta) nana-wa-n 'I hurt'
1sg-acc hurt-1-3
b. (ñuca-ta) chiri-wa-n 'I am cold'
1sg-acc cold-1-3

2.6.2.

談話中に不定名詞句を初めて導入する"存在文"が各言語の中で特別な統語的待遇(特に語順に関して)を受け易すいことが知られている。動名呼応においても、存在文の中格を他の一般中格と分離して扱う言語例がある。又、語順を情報の新旧に組織的に感応させるルールを有す言語において、その適用の有無が呼応に影響して、非呼応現象が出現することがある。

2.6.2.1.

Bantu 諸語の一つ Rwanda[11]では、平叙文の非総称的主語は definite でなければならず、動詞と

(25) umugado ya-riho ku-nzu
man he-was in-house
'The man was in the house'

呼応する。しかし初出辞項を含む存在文 v.g.(26) には Locative marker が呼応形態素として現われる。Givón はこの表現が(27a)のような文法的基底構造から(b)に再分析される結果、生

(26) kyeera ha-riho umugabo a-ka-kira abaana batatu
long-ago there-was man he-cons-had children three
'Long ago there was a man (and) he had three children,

れたものであるという議論を示唆している。類例は Swahili[11]にも発見される。(28b)では、「存

(27) a. 'A man was at the place"
b. 'The place had a man "

在する」NP は Case Marking によって非主語であることが明示され、所格との間で一致が成立しているのが見られる。

(28) a. mtoto a-li-kuwa nyumba-ni
child he-past-be house-in
'The child was in the house'
b. nyumba-ni pa-li-kuwa na mtoto

house-in there-past-be with child
'There was a child in the house'

2.6.2.2.

存在文の動詞が、現代ではその語彙的意味を失った「所有」の動詞で表現されるイベリア・ロマンス語でも、名詞句はこの存在動詞と呼応せず、また語順においても、無標S－V順序と異なる有標な動詞－名詞句を示す。例(29)のカタロニア語存在文では、動詞haver 'to have' が中立

(29) a. Hi ha una taula. 'There is a table'
there has a table
3 sg

b. Hi ha cinc taules. 'There are five tables'
there has five tables
3sg

的な3人称単数で強制呼応するが、所格など一部の副詞的補語を指示するcliticのhiを義務的に伴う。もし存在が前提された定名詞句を主題とする文であれば、動詞にはser 'to be'が利用され、主格と人称・数呼応をしなければならない。

(30) a. La taula és davant la finestra.
b. the table is in front of the window
3sg

b. Les taules són davant la finestra.
the tables are in front of the window
3pl

2.6.2.3.

所有者／被所有物の関係を表わす構文において、Israel Hebrew[12]は、被所有物が主語として、possessorが間接目的語として呼詞になる過去時制文e.g.(31)の他、口語では、3人称単数男性形のhayaが複数主語の文に共起する〔cf.(32)〕。ここにも動詞非呼応化の端緒がうかがわれる。

(31) a. hay-a l-o sefer. 'He had a book'
was-it to-him book

b. hay-u lo- sfarim 'He had books'
were-they to-him books

(32) haya lo harbe sfarim 'He had many books'
many books

2.6.2.4.

Zenéyze〔cf.本論その一、§1.4.重複呼応〕[13]においてNPの新旧情報価がagreementとdis-agreementの決定に大きな役割を演じる。無標語順は(33)に示されるようにS－Vで、動詞はそ

の接尾辞と先行付接辞とで２重に主語NPと一致している。

(33) a. U Zorzu u vêńe.
the George mas.sg com-3sg
'George is coming'

b. A Katayniŋ a vêńe.
the Catherine fem.sg come-3sg
'Catherine is coming'

c. I vežiŋ i vêńu.
the neighbors pl come-3pl
'The neighbors are coming'

上掲a．b．c．各文はそのままで動詞句と主語を転位させることも可能だが、この時、動詞に文強勢がかかり、２重一致をtriggerしている名詞句はより旧い、重要度の低い情報を伝達する。ところが主語が動詞に後置されると、動詞は一律に３人称単数となり、clitic呼応も停止し男性単数形と同じuが主語の性数と無関係に与えられる構文（34）も出現する。機能的観点から見ると、これ

(34) a. U vêńe u Zorzu.
b. U vêńe a Katayniŋ.
c. U vêńe i vežiŋ.

ら各文の主語又は文全体がrhemeであるとされる。注目すべきことは、重複呼応のこの言語において、非呼応化は付接辞呼応にも接尾辞呼応にも同時にi.e.２重に起きているという事実である。

2.6.2.5.

ロシア語の否定文[14]では主語が非主格化されることがあり、無主格構文で動詞は３人称単数中性の呼応形態素をとる。

(35) a. V našem lesu rastut griby.
in our forest grow mushrooms
3 pl nom.pl

b. V našem lesu ne rastet gribov.
in our forest not grow mushrooms
3sg gen.pl

しかし『否定』が断定文を否定するのか、存在文を否定するのかによって（36ａ，ｂ）のような対立が生じる。動名一致のある(b)文は‘返事’の存在を前提するが、それが着かなかったことを主張

(36) a. Otveta ne prišlo.
answer not arrived
gen.mas.sg n.sg

b. Otvet ne prišel.

answer not arrived

nom.mas.sg mas.sg

するのに対し、初層主語が生格に置かれ、強制呼応させられた(a)文では、‘otvet’そのものが、その指示対象を持たない事、viz. 存在しないことを主張している。

2.6.2.6.

呼応の一時停止が正常呼応と対立する類例はSyrian Arabic[15]にも見られる。複数呼応を示す(37a)文の主語は特定の‘本’に言及している。一方(b)文のl-kətᵊbは定名詞句であるが総称的解

(37) a. l-kətᵊb mā bihəmmū.

the books not interest pl.

'The books don't interest him'

b. l-kətᵊb mā bᵊthəmmo.

interest fem.sg

'Books don't interest him'

釈を受け、動詞は非呼応の女性単数markerを含む。ただ有生主語に関しては上述のような非呼応は許されず、数相応が義務づけられる。

2.6.3.

文法構造上、特に興味深いのは、ある種の統語プロセスの結果生じる無呼詞状態における強制呼応の事例であろう。中心になるのは、主語の退位が起こりながら主語への昇進が欠如する無人称受動(Impersonal Passive)構文である。

2.6.3.1.

Hindiは完了形時制で絶対格一項呼応を見せるが〔cf. その2, p. 13〕、受格が後置詞-koでmarkされていると、呼応すべき絶対格でなくなり、動詞は男性・単数呼応標識を得る。

(38)[16] lərkõ ne cit̤t̤iyõ ko phar̤ diya

boys ag. letters obj. tore up

mas.pl fem.pl mas.sg

例文(38)でlərkõは能格標示され、元来、呼応に参加しないのであるが、他動詞目的語cit̤t̤yõは絶対格として呼詞になる筈である。しかし、Hindiには〔有生〕で〔定〕の受格を義務的に、又〔+definite, −animate〕の受格は任意的に後置詞-koを付加するルールがあり[17]、このmarkingを受けたNPは動詞呼応をtriggerすることは出来ない。関係文法の枠組みで分析するならば、(38)のcit̤t̤iyõは初層で動詞と絶対格(直接目的語)の関係を結んでいるが、反受動化(antipassivize)[18]されて非絶対格〔恐らく与格〕に、変更を受けたため、この文には呼詞になり得る名詞句が存在しなくなり、無標呼応形態素のmas. sgが強制付与されたと考えられる。表層の格表示-koはこの文法関係変更の事実を反映している。

Hindi の受動文動名呼応にも非呼応が生じる場合がある。他動詞文の受動では、予想されるように昇進した旧受格 i.e. 新主語と動詞は呼応するが、次文（39）のような自動詞能動文の受動化では、中格 larke が自発降格（Spontaneous Demotion）するだけで、新たに主語の座を奪うNPを存在しない。また larke は－se でマークされる失業者（Chômeur）であり、呼詞とはなり得ず、

(39)[19] a. laṛke nahī soe
boys not slept
mas.pl mas.pl
'The boys did not sleep'

b. laṛkõ se soyā nahī gayā
boys by slept not went
mas.pl mas.sg mas.sg
'It was not slept by the boys (The boys could not sleep)'

結局、助動詞として導入される janā'to go' にも本動詞にも3 sg.mas 形がagreement morpheme として与えられる。

同様に、主語も直接目的語も後置詞でマークされた他動詞文が受動化すると、非呼応が見られる。文（40）は受動を受ける前に、初層の直接目的語がその文法関係を失っており、ここには主語→

(40)[19] laṛkiyõ se zakhmī ādmiyõ ko nahī dekhā gayā
girls by injured people not saw went
fem.pl mas.pl mas.sg mas.sg
'The injured people were not seen by the girls'
(The girls could not bear to see the injured people)

Chômeur の関係変更と若干の副作用が含まれるだけである。従って、この場合も一致に参与する最終項NPはなく、dekhā, gayā とも3人称男性・単数無標形をとる。

2.6.3.2.

トルコ語も自動詞文の受動化が許されるが、その際、動詞は6 種の人称・数カテゴリー別のsuffix の中で最も無標なØ形の3 人称単数で呼応する。

(41)[20] a. istasyon-a bu yol-dan gid-er-ler
station-to this way-by go-Aorist-3pl
'They go by this way to the station'

b. istasyon-a bu yol-dan gid-il-ir
go-Pass-Aorist 3sg
'It is gone by this way to the station'(One may go by this way to the station)

類例(42)(43)においても動詞は、主語が格下げられたことを示す受動形態素を内包しているが、派生

主語はなく、強制的な3 sg 形で特徴づけられる。

(42)[21] Kadin-la konuṣ-ul-du
woman-with talk-pass-past 3sg
'The woman was talked with'

(43)[21] Ben(im)-le konuṣ-ul-du
I-with talk-pass-past 3sg
'I was talked with'

これらの非人称では、行為者の不在というよりはむしろ、不特定の汎人間主語(汎称)や特定人間の匿名化、背景化etc.の意味に対応する統語的手段として、自動詞主語の非主語化が利用されている。

2.6.3.3.

Hindiの例文(40)に見られたように、直接目的語が通常の対格として扱われないで、別格の marking が与えられる構文で、その名詞句は受動化に際して、主語へ昇格できないケースがしばしば起こる。ドイツ語及びラテン語で受格は、通例、対格表示を受けるが、少数の動詞e.g.独語のhelfen 'to help', ラテン語invidēre 'to envy' は与格に指定されたNP を支配する。これらの動詞を含む文に受動規則が働くと、直接目的語はその地位 (i.e.与格)に留ったまま、動格(＝主語) が降格してpassive morphology が導入される。

(44)[22] a. Der Lehrer half dem Schüler.
the teacher helped the pupil
dat.

b.[23] Dem Schüler wurde geholfen.
the pupil became helped
dat. 3sg
'The pupil was helped'

(45) a. mihi invide-t 'He envies me'
me(dat.) envy-3sg

b.[24] mihi invide-tur 'I am envied'
me(dat.) envy-pass 3sg

ここで、受動文の動詞は (44b)(45b) 共に3 人称単数形を示しており、無人称受動文と呼ばれる。両言語は又、自動詞文に対しても受動を適用することができるが、上例文と同様、呼詞の不在にもかかわらず、動詞は3 sgの強制呼応標識を含まねばならない。

(46)[22] Gestern wurde getanzt. 'There was dancing yesterday'
yesterday became danced
3 sg

(47)[21] curri-tur 'There was running'
run-pass 3 sg

2.6.3.4.

非有生の自然力を指す名詞句が他動詞主語から、斜格の一つ造格へ自発降格するが、受格は対格に止まる例がロシア語に存在する。(48)(49)に示されるようにpassive morphologyは無く、動詞は

(48)[25] Vetrom sorva-lo kryšu
wind tear up-past roof
mas.inst n.sg fem.acc
'The roof was torn away by the wind'

(49)[26] Ego ubi -lo molniej
him kill-past lightning
acc n.sg fem. inst
'He was killed by lightning'

初層の主語と一致せず、単数中性のagreement morphemeをもつのがこの構文の特色である。

北ロシア語方言は自動詞文からも自由に受動文を形成する。(50)では、copula動詞も被動形動詞

(50)[27] U menja uže vstato bylo
by me stood aux
part.n.sg n.sg
'By me there's already been getting up'
(I have already gotten up)

過去形も中性単数で現われている。その理由は、基底主語「私」が前置詞uに先導される斜格へ格下げられ、呼応すべき主格NPが欠如するからである。他動詞文に対して受動化には3つのsub-type が見られる。一つは、受格が表層主語として一致をtrigger する、現代標準ロシア語に近い文タイプであるが、(51)(52)のように受格が対格を維持するか、主格表示を獲得するものの動詞との間に呼応は成立せず、強制呼応形になる2種類の非呼応型も報告されている。

(51)[28] Ea muža ubito na vojne
her man killed in war
acc. part.n.sg
'There was killed her husband during the war'

(52) Pereexano bylo doroga tut
crossed aux road there
part.n.sg n.sg. fem.sg.nom.
'There's been crossing over the road there'

2.6.3.5.

典型的なオランダ語文で、動詞は主語の後に置かれ主語と人称・数で相応する呼応形態素をとる。

(53)[29] De jongens fluiten.
The boys whistle
'The boys whistle /are whistling'

助動詞 worden "to become" と過去分詞で形成される受動文には2 種類あり、その一つは、(53)のような自動詞文から派生され得る疑似受動文と称されるもので、初層主語は前置詞に先行された **chômeur** になるが、動詞に前置される要素がない時、動詞の前に、弱い場所指示副詞erが挿入される。新しい層には文法項NPは存在せず、いずれの文でも助動詞は非呼応の3 人称単数形であ

(54)[29] a. Er wordt door de jongens gefloten.
there becomes by the boys whistled
'There is whistling by the boys'
b. Door de jongens wordt gefloten.
'By the boys (there) is whistling'

る。また、動作主が表層化しない Impersonal passive も可能で〔cf.(55)〕、この種の文型では〔+human〕Agent のみが黙了たれる。

(55)[29] Er werd gefloten.
there became whistled
'There was whistling /People whistled /Someone whistled'

ところで、意味構造における辞項の不在に起因する無主語文にはerは現われず、動詞の3 人称単数形を誘発する3 人称中性単数代名詞hetが形式的主格として用いられている。

(56) Het regent. 'It is raining'
it rains

(57) Het spijt me. 'I am sorry'
it is sorry me

2.6.3.6.

能格型言語である Greenlandic Eskimo の動詞は2 項呼応を持つ。2 種の呼応形態素間の形態的同定や分離が不明確であるが、その呼応も、一応、能格タイプで、絶対格と能格（＝関係格）が呼詞になると考えられる。この言語には正典的受動と、能格を削除し絶対格一格の自動詞文にすることによって形成される受動文の他、接辞—nar—を導入するimpersonal 文が存在する。文(58) a . b を比較すると、不定動作者を指示する—nar—を含む（b ）文では能格との呼応は失わ

(58)[30] a. Taku—vaa 'He sees him'
see —IND：3 sg 3 sg
b. Taku—nar—puq '{I / Someone} see(s) him'
see—imps—IND 3 sg

(59)[30] a. Aŋut−∅ autlar−puq

man−Abs go away−IND：3 sg

'The man went away'

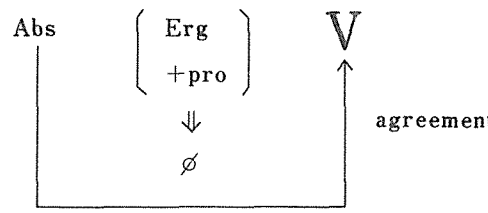
b. Autlar−nar−puq

'{I / Someone} went away'

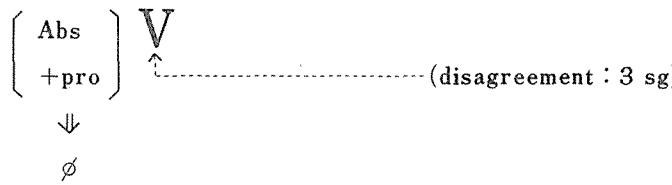
れ、−puqにより絶対格の3sg のみがmark されている。しかし、(59a)のように一項自動詞文の文法項が降格して潜行してしまうと、呼応の相手が無くなる。一方、"mood"と人称・数標識がパックになっている関係上、少なくとも一項の呼応標識を含まねばならない。

そこで、これまで見て来た多くの言語と同様に、(59b) で動詞は3 人称単数形となったのである。興味深いのは (58b、59b) 両文は共に『動詞−nar−puq』という構造を持っていながら、他動詞に付加された−puq は絶対格の3sg を表わすのに対し、自動詞の屈折である (59b) の puq は何の辞項もcross−reference しないという点である。この関係は次のように図式化することができる。

(60) a. 他動詞 impersonal



b. 自動詞 impersonal



2.6.4.

無人称受動文の一種として再帰無人称文がかなりの数の言語に発見される。この構文における動詞の強制呼応に関する検討は、紙幅の都合で、次稿（動詞呼応の類型、その4）に譲る。

2.7.

不呼応が基調となるような呼応システムは呼応の存在理由を否定するものである故、決して実在し得ない筈である。そこで、部分的不呼応であって且つ、前項に見たような強制無標呼応でないケースを考えてみることにする。

表層の格表示が与格を示しながら若干の主語特性をもつ、いわゆる与格主語文の存在が諸々の言語に指摘されている。Georgian[31]の与格主語はCase Markingの上で与格を保ちつつ、記号化特性の一つであるAgreementに関して主語性を部分的に獲得し又、それを拡大する傾向にある。Old Georgianでは主格ＮＰのみが数相応を統御するのに対し、標準Modern Georgianは1・2人称代名詞を数に関して動詞と呼応させるが、3人称では与格にマークされたＮＰが数呼応を引き起こし、主格はこれに関与しない。

(61) a. mas uqvars is 'He loves him'
him him−loves−he he
(dat) (nom)

b. mas uqvars isini 'He loves them'
him him−loves−they they
(dat) (nom)

c. mat uqvar*t* is 'They love him'
them *them*−love−he he
(dat) (nom)

d. mat uqvar*t* isini 'They love them'
them *them*−love−they they
(dat) (nom)

(61c、d)で経験者与格と動詞の間で一致が成立し、主格とは不呼応である。この現象は口語では更に一般化され、主格1・2人称である場合にも与格の数に相応する呼応形態素をとる話し手もあるという。即ち、格表示で矛盾するＮＰを統語的に主語と分析し、主語呼応を行うことになる。[32]もし形態的特徴の再分析が平行して伴わなければ、呼詞のベースとなる統語格体系と、名詞の表示のベースとなる格体系が大幅に、又は全く食い違う呼応類型の萌芽である。§2.8.では名詞句Case MarkingとVerb Agreementにおいて、このような格分裂が広範に生じる言語を見る予定である。

(未　完)

〔注〕

(1) Bernard Comrie, "Ergativity."−Winfred P.Lehman (ed.) Syntactic Typology. University of Texas Press. 1978. p.341

(2) Jaime Berenguer Amenós, Gramática Griega. Bosch, Casa Editorial, Barcelona. 1969. p.159

(3) Domenico Parisi, "The Past Participle" −Italian Linguistics 1 (1976), pp.77−8, 99, 104

(4) idem. pp.103−4

(5) Zenéyzeの他動詞構文においても、3人称のcliticが現われる時のみ、直接目的語と過去分詞が呼応する。それ以外の場合は、主語とも直接目的語とも不呼応である(Wayles Browne and Bartolo Vattuone, "Theme-rheme structure and Zenéyze clitics."−Linguistic Inquiry 6 (1975), pp.139−140)

① A Katayniŋ, lô vista. "Catherine, I saw her."
the Catherine her–I–have seen

② L ô vistu. "I saw him."

③ L ô vista. "I saw her."

④ Ô vistu a Katayniŋ. "I saw Catherine."
I-have seen
mas·sg

(6) Francho Nagore, Gramática de la lengua aragonesa. Librería General. Zaragoza, 1977. pp.85, 87–9

(7) Antonio M.Badia Margarit, Gramática catalana. Editorial Gredos. Madrid. 1962. pp.423, 465–9
ただし Valencia, Baleares 方言では非代名詞NP直接目的語と呼応する。

① he vista la mare. "I have seen the mother."
have seen the mother
l sg fem·sg fem·sg

② he trobats els amics "I have found the friends."
have found the friends
l sg mas·pl mas·pl

(8) カタロニア語分詞呼応のさらに詳しい諸相については Joan Solá, "Concordança del participi passat." –Estudis de Sintaxi Catalana 2 . Edicions 62. 1973, pp.59–86 を参照されたい。

(9) Pierre Lafitte, Grammaire Basque. Edition revue et corrigée. San Sebastián. 1979. p.346

(10) Peter Cole and Janice L,Jake,"Accusative subjects in Imbabura Quechua."–Studies in the Linguistic Sciences 8 No.1 (1978), pp.72, 75

(11) Talmy Givón, "Topic, Pronoun, and Grammatical Agreement." –Charles N.Li (ed.) Subject and Topic. Academic Press. 1976. p.174

(12) W. Browne and B.Vattuone, op.cit. pp.136–7

(13) idem. pp.176–7

(14) Leonard H.Babby, Negation and Subject Case Selection in Existential Sentences. IULC. 1978. pp.–1, 12–3

(15) Edith A. Moravcsik. "Agreement"–Joseph H.Greenberg (ed.) Universals of Human Lahguage 4 . Stanford University Press. 1978. pp.345, 352

(16) Rajeshwari Pandharipande and Yamuna Kachru, "Relational grammar, ergativity, and Hind-Urdu." –Lingua 41 (1977), p.224

(17) E.A.Moravscik, "On the case marking of objects."–J.H.Greenberg (ed.) op.cit. p.275
直接目的語の非対格化を反受動の変種とする分析については、次の拙稿を参照されたい。
Atsumi Deguchi, "Antipassive and Reflexive passive in Spanish. "–Lingüística Hispánica 1 (1978), pp. 54–73
———————— , "Syntax of direct objects in Spanish."–Lingüística Hispánica 2 (1979), pp.45–62

(19) Rajeshwari Pandharipande, "Exceptions and rule government : The case of the Passive rule in Hindi." –Studies in the Linguistic Sciences 8 No.1 (1978), pp.155–6

(20) G.L.Lewis, Turkish. Teach Yourself Books. 1953. p.93

(21) Edward L.Keenan, "Some universals of passive in Relational Grammar."–CLS 11 (1975), p.347

(22) Bernard Comrie, "In defense of spontaneous demotion : The impersonal passive."–Peter Cole and Jerrold M.Sadock (eds.) Syntax and Semantics 8 (1977). p.51

(23) werden の前に何らの要素が前置されなければ中性 es が現われるが、
Es wurde dem Schüler geholfen.
一致を惹起するのは esでなく、空位の主語の座を維持するために挿入されるdummy に過ぎず、3 sg、呼応は削除された "es" と一致しているという主張と、無呼詞と呼応して3 sg になっているという分析とは大差がない。

(24) E.Keenan, op.cit. p.345

(25) I.M. Pulkina, A Short Russian Reference Grammar. Russian Language Publishers. Moscow. 1975. p.96

(26) W.Harrison, "The expression of passive voice."–Dennis Ward (ed) Studies in Modern Russian Language 4 . Cambridge at the University Press, 1967. p.39

(27) Alan Timberlake, "Subject properties in the North Russian passive."–Charles N.Li (ed) op.cit p.549

(28) idem. p.550

(29) Robert S. Kirsner, "On the subjectless pseudo-passive in Standard Dutch and sentences of back ground agents. —Charles N. Li (ed) op. cit. p.387—8

(30) Anthony C. Woodbury, "Greenlandic Eskimo, ergativity, and Relational Grammar." -P. Cole and J. M. Sadock (eds.) op. cit. pp.320—1

(31) Peter Cole, Wayne Harbert, Gabriella Hermon and S. N. Sridhar, "On the acquisition of subjecthood." -Studies in the Linguistic Sciences 8 No. 1 (1978), pp.63—4

(32) 数呼応と人称呼応は適用条件が異なるので別々のルールとみなせる。従って、表層与格が実はinitial subject であると考えるならば、この種の3 人称構文で、動詞は初層文法関係の主語とnumber-agree し、終層主語及び間接目的語に person-agree する重層型〔cf. その2 、§2．3．0.〕の複合呼応であるという分析もできる。詳しいData はAlice C. Harris, "Number agreement in Modern Georgian. —Bernard Comrie (ed.) Classification of Grammatical Categories. Linguistic Research, Inc. 1978. pp.75—98に見られる。

(April 20, 1980)